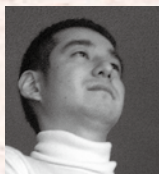


私が Iターンで なくなる日



財団法人松下政経塾
第26期生
兼頭 一司

Iターンと言われると少々面映ゆい。
確かに全く縁もゆかりもなかった土地で
の新たな挑戦ではあるが、元々自分は愛媛で
育った人間であるので正確には「Jターン」
なのであろうし、実際には一度郷土を捨てた
薄情者である。

私はこの春から上島町に移住。共助と共生
に基づく地域コミュニティモデルづくりを
目指し、まずは島の物産を開発・販売し、島
の暮らしに還元するコミュニティビジネス
事業の立上げに取り組む。無論そのためには
まずは地域を知り、地域に溶け込むところか
ら始めなくてはならず、地味で長い道のりが
この先に待っている。

私は丹原の野山で育ち、高校卒業後は、そ
れまでの人生と同じ期間東京周辺で過ごし
た。田舎の人間関係の煩わしさに辟易とし
て、都会の生活に憧れ上京した口なのである

が、次第にその憧れの都市生活に
疑問を抱くようになった。「生命
感」を感じられないとでも言うの
だろうか。もちろん自然が少なく
こともあるのだろうが、余りに物
質や経済、効率性、合理性という
ものに偏り過ぎていて、人間の顔
や感情というものが見えない社会
になっている。このままでは「や
ばい」と思った。出口を探すうち
に、かつて煩わしいと感じたご近所のおせっ
かいに行き着いた。

心の空洞化も、環境問題も、財政問題も
根っこは同じ。かつて地域共同体にあったよ
うな人と人、人と自然のつながりが育んだ
思いやりや感謝の心が希薄になってきたの
ではないかと考えたのである。しかも人や自
然のつながりが残っているはずの地方は、今
どこもプチ東京を目指しているではないか。

この流れを止めることが出来なくてもせ
めて一石を投じたいと、安定的サラリーマ
ン生活に別れを告げ、松下政経塾の門を叩
いたのが三年前。様々な現場に赴き、地域づ
くりを学び、体験する中で最終的に上島町を
フィールドに選んだのである。

実はIターンのフィールドを選ぶプロセ
スには、当誌の発行元である、えひめ地域政
策研究センター（以下、センター）が大きく
関わっている。双海の若松さんの下へ転がり
込んだのがきっかけで、昨年の1月、2月に、
センターにてインターンシップをさせて頂
いた。

わずか1ヶ月あまりの短期間であったが、

上島町にて地元小中高生を主体にした地元
学プログラムを実施。地元のおばあちゃん
のお話を聞き書き



幸運なことにセンターの支援
する「えひめ地域づくり研究会
議」の20周年のタイミングで、
記念のシンポジウムの企画、運
営に携わることが出来た。

兵頭さん、脇田さんといった
若手研究員に交って夜中に妙
なテンションで作業したもの
良い思い出だが、準備期間に県
内の様々な地域づくりの現場
に触れ、実践者達に出会えたことが、現在の
私の活動の大きな推進力になっている。学
び、相談できる数多くの先輩、仲間達が周り
にいることは、右も左もわからぬ自分にとつ
ては、どんなに勇気づけられることか。

そして、上島町を選ぶきっかけとなった上
島町の地域活動家・村上律子さんとの出会
いもまた、このインターンシップ中であつた
のだ。

かくしてその一年後、私は上島町に居を構
え、そのきっかけを作ってくれたセンター、
研究会議、そして松下政経塾の合同開催によ
り、島の子どもたちを主役にした「希望の島
フォーラム」を催すことができた。

新たなスタートに当たって、身に余るご恩
を、先輩方、仲間達、地域の皆様に頂いたわ
けであるが、本番はこれからである。仲間が
いることは心強いことではあるが、決して甘
えることなく、しかし焦らず、地域に根を生
やした活動を地道に行うことで恩返しをし
ていきたいと考えている。

「Iターン者」が「地元の人間」になったら、
また寄稿したいと思う。